



忘れないための  
被災地キャラバン

芸術銀河 2014

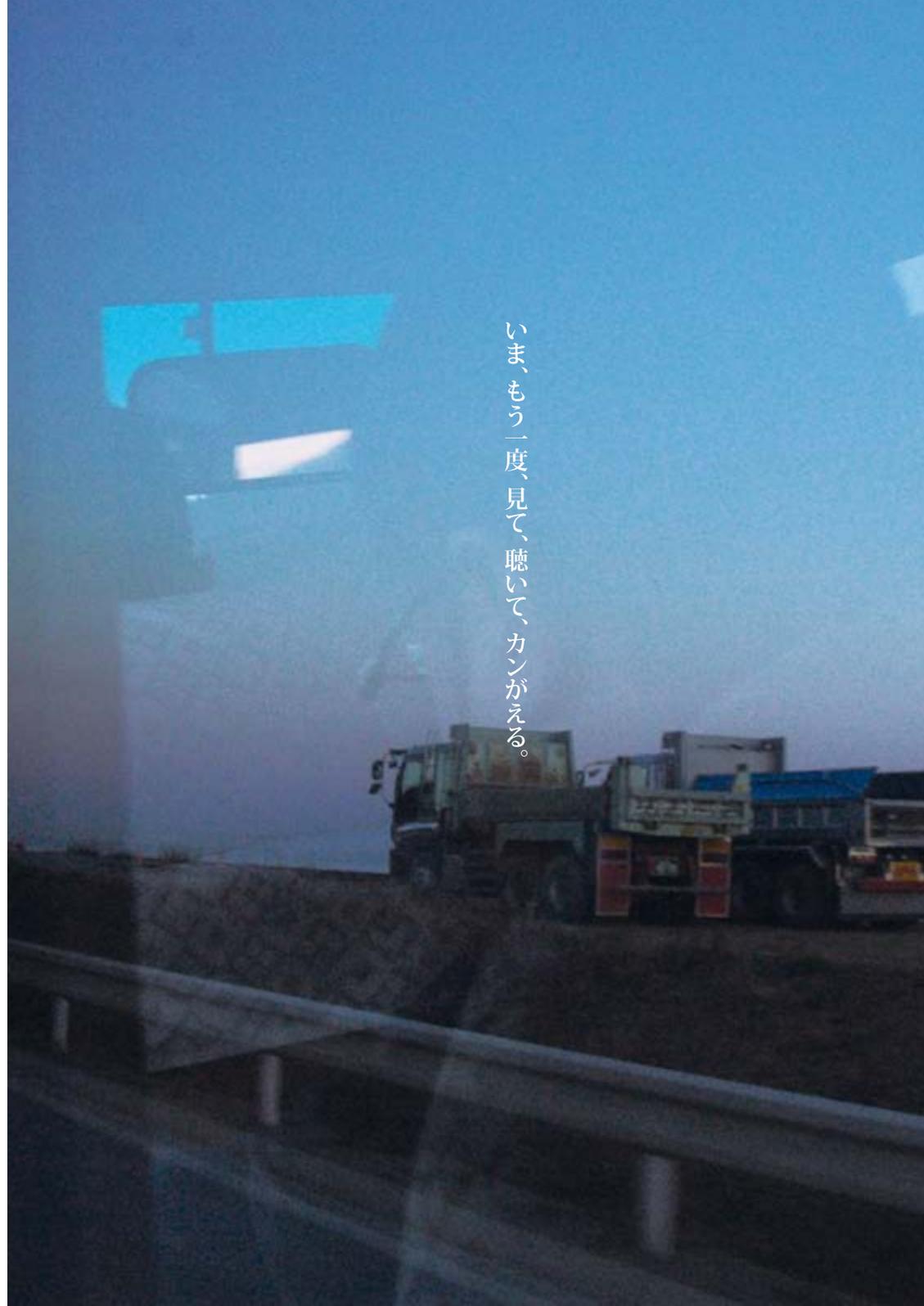
×

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

忘れないための  
被災地キャラバン

芸術銀河 2014  
×  
ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

いま、もう一度、見て、聴いて、カンがえる。



目次

プロローグ もう一度、見て、聴いて、カンがえた二日間

水戸雅彦

4

キャラバン一日目

Aコース 南三陸・女川震災遺構キャラバン

8

Bコース 雄勝法印神楽ダンス・キャラバン

12

キャラバン二日目

フォーラム

18

忘れないための被災地キャラバンに参加して

小野田照子

56

引用・参考文献

56

寄稿

感じてカンがえた旅

吉野さつき

58

もちかえり

小山田徹

60

忘れないための被災地キャラバンを終えて

鶴見幸代

62

雄勝法印神楽を習う

佐東範一

64

記憶は記録によってねつ造されてしまうから・・・

藤浩志

66

アーティスト／ナビゲーター プロフィール

68

エビローグ

69

※企画および本書で呼称する「震災遺構」とは、東日本大震災の津波被害を受けた象徴的な建物を指し示すための表現として使用しています。

## プロローグ

### もう一度、見て、聴いて、カンがえた二日間

いつの時代にも、マスコミその他のメディアに流れる情報は、さまざまな文脈で語られているから、一度ニュートラルな視点に立ち返って、もう一度ひも解いてみるのが大切なのではないかと思う。

それは、言い替えれば「現場に行き、現場で考え、現場で語る」ことであり、震災について言えば、「被災地で時の流れを振り返り、その地の人たちの話を聴き、その地で当事者の立場に立つて考えること」である。忘れないための被災地キャラバンは、そのような意図のもとに企画して、アーティストや一般公募で集まった参加者と共に実施したものである。

アーティストをホストにお願いしたのは、彼らの持つ独特の視点と洞察力が、深く鋭く対象物に迫る力（それこそがアーティストのアーティストたる所以であるわけだ）が、触媒となり、参加者にさまざまなイメージを喚起させることを期待したものである。そして、アーティストのイメージと発言にちよつとした解説を加えながら、いい形で参加者と繋ぐ橋渡し役として、経験と知見のある方々にナビゲーターをお願いした。そのことにより、被災地を巡る二日間の小さな旅は、深く充実し余韻の残るものとなったのではないかと考えている。

沿岸部には、昔と変わらぬ潮の満ち干があり、空と雲と風が少しずつその表情を変えながら、ゆつたりと地域と人とを包み込んでいた。重機のけたたましいい響きとともに進む復旧事業を横目に、津波被害で深く傷つき保存か解体かに揺れる建物を間近に見、地域の誇りである神楽の舞を習い、たくさんの人たちの声に耳を傾けた。あの日から今日まで積み重ねられた思い。忘れてはいけないことと、忘れなければならないこと。そしてこれから歩むべき道はどこへと繋がっていくのか…。一人一人の言葉の一つ一つが、心に滲みながらゆつくりと沈殿していく。それらは、現場で直接五感を通して、見て、聴いて、カンがえることによつてしか体験することのできないものであるのだと思う。

今回の参加者にとつて、それまでに持っていたイメージとは別な、新たなパス・ペクティヴが広がったとすれば、この事業の目的は達成されたと言える。しかし、もっと重要なことは、今回の経験を踏まえて参加者一人一人がどこに向かつて一步を踏み出すかである。

すべての道は開かれている。

キャラバン事務局（えずこホール） 水戸雅彦

# 自分の命を守れない人に 他人の命は守れないんだよ。

「死者八百二十七名のうち三割、二百五十八名の方はまだ見つかっていない。遺体の無い中で区切りで葬儀なんですよ。もう一カ月経ったよね、半年経ったよね、一年経ったよねって。そうやって区切り区切りで皆さんけりをつけている方がたくさんいます。」

「でも三月十一日は特別な日。忘れちゃいけない日。死者八百二十七名を生んだ町としては、次もし津波が来ても死者ゼロにしようよというのが願いです。自分の命を守れない人に他人の命は守れないんだよ。自分の命を最優先にちゃんと避難しましょうよ、と。こわくてもなにしてもその先に必ず家族が待っている。信じてもらえば頑張れるはず。一日ちよつとなんだもん。もう声を発しない人と会うことくらいさみしいものはない。」

阿部真紀子さん（女川町観光協会）による講話の一部

キャラバン 一日目

# Aコース 南三陸・女川震災遺構キャラバン

保存か解体かさまざまな意見に揺れ続ける震災遺構。私たちは後世に、何を残し何を伝えていくのか。遺構の前に立ち、そこに住む人々の声に耳を傾け、「未来への記憶と記録」について考えた。

## Aコーススケジュール

- 2014年11月22日  
 10:00 仙台駅発  
 12:00 女川復興まちづくり情報交流館  
     昼食・講話 [1]  
 14:00 江島共済会館 [2]  
 14:30 おちゃっこクラブ  
 15:00 きぼうのかね商店街 [3]  
 16:00 石巻市立大川小学校  
 16:40 南三陸町防災対策庁舎 [4]  
 17:20 丸七水産 [5][6][7]  
 21:00 富谷町・東北自治総合研修センター着  
 [ ]は左写真番号

アーティスト 小山田徹  
 鶴見幸代  
 ナビゲーター 吉野さつき



### 南三陸町

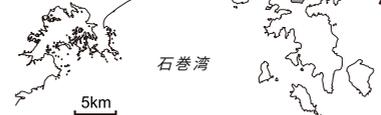
歌津地区・丸七水産  
 志津川地区・南三陸町防災対策庁舎

### 石巻市

河北地区・石巻市立大川小学校

### 女川町

女川復興まちづくり情報交流館  
 おちゃっこクラブ  
 江島共済会館  
 きぼうのかね商店街



「女川に着いてすぐに海産丼のお弁当を食べ、観光協会の方の震災にまつわるお話をお聞きしました。それから、東日本大震災の津波で横倒しになった江島共済会館を見に行きました。基礎から波に持っていかれて横倒しになった建物です。この建物裏の丘の上に病院が建っています、その病院の一階部分まで津波が来たそうです。その病院の敷地内にある「おちゃっこクラブ」に立ち寄り、運営をしている岡さんから話を聞いたりしました。色々なお店が集まっているきぼうのかね商店街に女川では最後に立ち寄り、鐘をみんなで鳴らしたり、お祈りしたり、お買い物したりしました。」

女川の現状を語る岡裕彦さん（おちゃっこクラブ）



その後、南三陸町の歌津地区で漁師をやっている高橋さん  
のご自宅にお邪魔しました。高橋さんは仕事場も家も海の目  
の前であって流されてしまいました。震災後いち早く自力  
で再建したご一家です。現地では高橋さんから振舞われたホ  
タテや海産物をいただきながら、ものすごくリアルに海とど  
もに生きてきた人の仕事の現場も、生活の現場もどのようにな  
っているかということを知ることが出来ました。」

(ナビゲーター 吉野さつき)



大川小学校に立ち寄った後に南三陸町に入りました。防災対策庁舎の建物  
を、ほとんど日が暮れかけた最後の明るさの中で見ました。明るい中で見る  
のと、こづいっ暗がりの中で見るのとではまた印象が違ったと思います。



「現地に滞在したのは全部で四時間でしたが、まず始めに、葉山神社の本殿に参拝し、神楽を舞う人間として宮司さんに正式にお祓いしていただきました。それから約三時間神楽を習いました。参加者全員、とても真面目にがんばったんですが、なかなか上手く舞えませんでした。雄勝法印神楽保存会の千葉先生と阿部先生から何回も何回も繰り返し教えていただきましたが、なかなか申し訳ないなと思いましたが、覚えられないんです。



## Bコーススケジュール

2014年11月22日

10:00 仙台駅発 [1]

11:30 石巻市中心部で昼食 [2]

13:20 石巻市立大川小学校 [3]

14:00 葉山神社着 [4]

15:00 雄勝法印神楽体験 [5][6][7]

18:00 葉山神社発

20:00 富谷町・東北自治総合研修センター着

[ ]は左写真番号

アーティスト 藤浩志

マルチナス・ミロト

ナビゲーター 佐東範一



時代を超えて連続と引き継がれる民俗芸能は、地域の誇りであると同時にそこに住む人々のアイデンティティそのものである。震災後、地域の人々が最も切望したのは、民俗芸能と祭りの復活であった。舞い手の話を聴き、舞の手ほどきを受けながら、地域に根差して生きる意味と、地域の未来について考えた。

# Bコース 雄勝法印神楽ダンス・キャラバン

エ エンヤー イヤー ハアアア  
エ エンヤー エヤー アア

覚えられないというか、頭と手と足がな  
んか一個集中すると他のことに頭が回ら  
なくなるということを経験しました。ま  
た体験として面と衣装も着させていただ  
きまして、面も見える範囲がすごく狭い  
んですよ。だからそれはやっぱり経験  
してみないとわからないな、というの  
がありました。参加アーティストのマ  
ルチナス・ミロトも自分の踊りを地元  
の方々にお見せするというシーンもあ  
りました。」

(ナビゲーター 佐東 範二)

キャラバン二日目  
フォーラム



# キャラバン二日目 フォーラム

一日目のキャラバンを終えた参加者とアーティスト。被災地を巡る「旅」をふりかえり、その可能性を探った。

## Aコース報告

**吉野さつき** では、こちらのAコースの方からお願いします。

**佐東範一** おはようございます。ではそろそろ始めさせていただきます。ナビゲーターの佐東と吉野です。司会進行をさせていただきますのでよろしくお願いします。

まず、昨日参加されたAとBの二つのコースを振り返るために、全員の方に少しずつ感想をお話していただければと思っております。

**佐藤幸徳** 宮城県内在住です。プライベートとか仕事で、沿岸部の被災地にはよく行く機会があったのですが、地元の人ですと改めて語り部のお話を聞くことがなかったですね。

それで初めて女川町おながわ観光協会の阿部真紀子さんのお話を聞いて、改めて震災のときのことを思い出しましたし、現地の方々がどういった気持ちでこれまでやってきたかも確認できて、今回「忘れないための」という

部分は、地元の人間としても再認識できて良かったなと思いました。それから印象に残ったのが、南三陸で水産業をされている高橋栄樹たけしさんのお話の中で、元に戻すだけでは震災前の状況に戻るだけで、例えば水産業を復旧しても右肩下がりがだったのではどうしようもない。今後これから右肩上がり、もしくはキープしていくような方法を考えていかななくてはならない、新たに復旧しなくてはだめなんだなど、改めて考えさせられました。

**大内伸輔** 震災が起こった最初の年には東京から被災地に行く機会があったのですが、それから足が遠のいていました。震災遺構は特に女川の江島共済会館えのしまがインパクトがありました。これが来月にはなくなってしまう。石巻の大川小はいろんな人た

写真左から 参加者の浅野五月さん、芦部玲奈さん、山口紀子さん、松本辰明さん



ちが訪れていて、慰霊の施設となっていましたね。南三陸の防災対策庁舎の保存については、さまざま意見がある中で現在も議論を重ねているとのことでした。暮らす所が高台に変わっていった環境の変化など、ひとつひとつ確認することができました。三年という時間をまざまざと感じられるいい機会だったと思います。**坂本有理** 私は震災後被災地の気仙沼に一度訪問したことがあるのですが、その後少しずつ自分との距離感を感じるようになってしまっており、今回実際に足を運んで見聞きできてよかったなと思います。共済会館や防災庁舎などを訪問し、改めて震災の恐ろしさを感じました。女川町では観光協会の阿部さんに、震災当時の状況やその後の話などをひとつひとつ丁寧にお話いただき、それぞれ印象に残っています。また、お

ちゃっこクラブの岡さんには「公営住宅に移られた方は一旦完結しているタイミングだけでも、仮設住宅に残られている方の状況は変わっていない。この先まだ四年くらいは仮設住宅を出て行くことはできなさそうだ」というお話を伺いまして、一部では震災の記憶が風化しつつありますが、現地ではまだまだ復旧段階にあるということを感じました。高橋さんからは復旧の際に直面する制度の問題などについてお聞きしました。高台移転による自然への影響にも触れられており、問題が山積みな状況に対していろいろ考えさせられました。震災時にはお寄りたちが助けられたというエピソードが印象的でした。**近藤穂波** 私は被災地に訪れるのが初めてだったのでとても良い時間を過ごさせていただきました。私の地

元も港がある所なので、頭の中で関連づけたりしていました。私の住んでいる所からは海が見えないのですが、今回、海沿いの方のほうが津波が起きた時の対処法をちゃんと考えていて、助かった人も多かったという話を聞いて、見えていないと逃げようと思わないですし、そういう自然災害はいつも海に向き合っている漁師さんたちのほうがよく分かっていることで、政府の政策、学者さんたちだけの地形に対する考え方は別の視点から防災を考えることも大事なんじゃないかな、と学べました。

**宮崎里子** 今日地震があったらそう  
で、震度6とか。なんか色々不安でございませう。私は仙台在住でございます。私は震災の時にですね、映像が遅れたことで状況がわからず、知り合いから「生きてたかー」というのが最初の言葉でした。三日ぐらいしてから仙

向きな方が多くて、違うなと感じます。特に昨日会った方々はもつと先を見通しておられました。「千年に一度の震災と言われるけれど、それは千年に一度の新しい町が作れるんだ」ということを皆さんおっしゃっていたり、高橋さんが「大変だった苦労話はもちろんできるのだけれども、そうじゃなくて、自分たちの経験がこれからの皆さんにどう活かせるかという指標になると思うので、そういう話をしたい」とおっしゃっていたのが印象的で、もつといろいろな話が見たいな、と思いました。

**三田真由美** 被災地を訪れたのは初めてで、昨日も色々な震災遺構を見て回りまして、メディアでは何度か見たことはあったのですが、実際見てみると絶対に動かないようなものが多い力で動かされて倒されてしまったものですか、折れ曲がった手すり

台の荒浜の映像を見た訳なんです。

昨日は震災遺構のほうを見せていただきました。南三陸町の防災庁舎が日没時だったのですけれど、やっぱりリアルでした。大川小学校は可哀な話ですね。「子らの声 空耳かしら 鬼やらい」。鬼やらいというのには節分です。前に行った時に作った句なんですけれども。

あと女川でいただいた資料の中の未来に向かっている子どもたちの絵が蘇りました。振り返ってみると子どもたちにつなぐのが今度の災害では大事だと思えます。あともつと複雑なんですけれど、福島の方も大変なので皆さん耳を傾けて見てください、ということですよ。

**野口まどか** いま仙台に住んでいますが、仙台で感じる震災というのはすごく後ろ向きなイメージが強いんですけど、沿岸部に来てみると本当に前

すとか、力の方向ですとかそういうものを目で見てリアルに感じる事が出来て、本当にすごいことが起きたんだなと感じました。

印象的だったのは高橋さんのところでお話を伺いまして、年配の方々が元々持っていたお米で、水と火があればご飯を炊けるとか、現在ですと電気ジャーを使つてとかそういうものじゃなく、元々の生きる知恵みたいなものを教えてもらいながら被災した生活の中でやっていった話を聞きました。もともとその地域に様々な年代層の人がいて、そういった方々から生活の知恵を受けられる環境があるからこの地域がそうやって被災以降の生活をしてこれたというのがあって、私が住んでいる東京で実際に起きたら、たぶん今はそういうコミュニティがないことを感じ、被災はもちろんなこと、地域の差みたいなのをちょっと感

Aコース  
おちゃっくクラブ [女川町]

女川町復興連絡協議会会営のコミュニティハウス。被災したコミュニティには語り合う場が必要と、震災から半年後に女川町地域医療センター敷地内にオープンした。その後、住民と一般社団法人対話工房が共同で内装を手がけた。医療センターの利用者だけでなく、町内外の人々が集い、出会う場になっている。



じられたということがありました。

**浅野五月** 私は震災のあとの九月に女川と石巻に向う機会がございました、その時に話を伺ったのですが、一杯で、今日をどうしていくか」という話を伺うのがほとんどでした。三年ぶりに女川の町の様子を拝見したり、三年間にどのようなことをなさってきたかを直接伺うことができました。あわせて、復興ということと同時に、例えば人口流出や格差が生まれてきているとか、新たな問題が生まれているんだという、見過ごせない現状も知ることができて、色々と考えたり、気づくべきことがまだまだあると改めて感じました。また逆に自分の身に置き換えてみると、私はちようど今沿岸部に住んでいるので避難場所が明らかにないことを本当に考えなくてははいけない

んだな、と実感しました。

**声部玲奈** 今回沿岸部の被災地を初めて訪れまして、昨日すごくお天気が良かったので海がすごくきれいで、家が流されてしまっていて更に静かで、震災前は本当に美しい町だったんだらうなど海を眺めながらそんな想いがしました。どの方も「来てくれてありがとう」とまずおっしゃってくださいまして、温かく迎えてくださいました。そういう風に歓迎されることを想定していなかったので、すごく印象的でした。

またそこに行ってお話を聞いた皆さんがすごく前向きかつとても謙虚で、今も震災後に自分たちが全国から支援を受けたことを忘れずに「たくさん支援をいただいでやっていく気力をもらったから自分たちは頑張っていかなくてはならない」と聞きました。もしかしたら震災直後に寄

付をした人たちはもう忘れてしまっているかもしれないのに、受けた恩をずっと忘れずに今も考えている方々がいらつしやることも印象的でした。

それから、語り部の方の生の声による「語りの力」をすごく感じまして、今までニュースなどで何が起ったかということを知っているはずでも、生の声で聞いたこの体験や印象だとか、声そのものは私の体の中に残り続けるんじゃないのかな、という気がしました。

**松本辰明** 被災地を訪問するのは今回で五回目になりますが、久しぶりに訪問させていただきました。最初に被災地に行つた時はいろんなものが散乱していて、風景が叫んでいる、という印象でした。二年目三年目になると、場所によっては瓦礫が撤去され雑草が生い茂って、風景が

つぶやきや愚痴に変わりつつあるという印象でした。そのうち何も語らなくなってしまうのではと思いましたが、今回震災遺構を間近に見たことよって、あの時の風景の叫びを改めて再確認しました。

もうひとつは女川で工事車両のラッシュを見て、女川は「元氣だなあ」「復興に向けて活気づいている」という印象を持ちました。また現地の岡さんのお話の中で「震災で大人が気が減入って元氣がなくなっている時に、昔不良少年だった若者たちが郷土芸能を通じて元気づけてくれた」というお話が印象深く残っています。

高橋さんのところでは、行政の硬直性のお話がありました。漁港は一種二種というように種別があり、より広い二種にしたくとも、行政の壁が厚くてなかなか難しいということ

でした。行政には行政の立場があるのでしようが、もっと柔軟な対応ができないのだろうかと思いましたが、今回のキャラバンは、これからの復興を考える上で、大変参考になりました。

**海子揮一** 宮城県名取市に住んでいます。女川はもう六十回以上通っている場所なんです、今の工事の状況だと一カ月でもブランクがあると景観が変わってしまいます。例えば震災後に仲間と始めた「対話工房」の活動で「送り火」を女川の人々と開催したんですが、その体験を共有した会場の敷地も土で覆われました。あるいは女川にいる人でも気がつかずに山影で地形が変わっていて、そうした今が一番忘却しやすい時期であり、町内の人でも町外の人でもこの「忘却」をも共有しているような感覚があります。



Aコース

**南三陸町防災対策庁舎 [南三陸町]**

平成8年に旧志津川町の行政庁舎として建設。鉄骨造3階建て。東日本大震災の津波は地上12mの屋上を超え15.5mに達し、外壁はすべて剥がされ(※2)鉄骨と床だけが残った。屋上に避難した40数名中、電波塔や手すりにしがみついていた10人の職員が助かった。(※3)



Aコース

**江島共済会館 [女川町]**

昭和50年代前半に建てられた女川町町営の宿泊施設。鉄骨造4階建て。主に離島の江島島民が利用していた。津波により移動横転した。震災遺構の候補として保存が検討されていたが、建物自体の耐久度や復興計画への影響を考慮して平成27年1月に解体撤去された。(※1→P56参照。以下同じ。)

(写真：平成26年12月撮影)



南三陸町 丸七水産にて浜呼称地図を囲む（写真左から 吉野さつき、高橋七男さん、島山幸男さん、高橋栄樹さん）

キャラバンでは南三陸の高橋さん御一家がお住まいの自然がとても印象的で、震災直後のお話も伺って、私自身も名取市で被災して、その当日の停電した夜の星の美しさとか、避難所でみんなが知恵を出し合って水や暖かさなど生きるために基本的なものを確保しようとしていた記憶も一緒に蘇りました。震災とは確かにいろんな悲劇をもたらすのですけれども、同時に私たちの足元にある大事な知恵だったり、つながりだったりを呼び起こす、そういった役目もあつたんじゃないかな、と感じました。

**木村敏之** よくある震災遺構の切り口として、維持費をどうするんだ、作つたはいいけれどこんなにお金かかるものを残すんだつたらもつと使い道があるんじゃないか、というよくある話がひとつ。あともうひとつ

話題になりがちなのは、遺族や被害者の人の心情に対応すると、どうしても残すのは心苦しいという声にどう対応するか。

大きくこの二つで宮城の震災遺構の話はくくられることが多いのですが、そこに違う意見というか、外部の人の、特にものを作る仕事を長いスパンでやっている人の意見を聞きたいなど思つて、今回参加していません。結論から言うと、具体的に「じゃ、こうしよう」という話は正直見つけられなかったのですが、ただ考え続ける、少し視野を広げて目線を遠くにに向けて考え続ける、たぐさんの要望の意味を問われているのかな、ということを抱えて帰ってきた次第です。

**吉野さつき** では、このままAコーズのアーティストの方から少しお話しただけですか。

**鶴見幸代** 私は沖縄から来ました。今回私はこうした壊滅的な被災にあつた場所に初めて来ました。震災自体を身をもって体験している訳ではなく、という意味で、そんな遠い所から来た私に何かできるのかどうか、大変心配しながらの参加となりましたけれども、その自分にあつた壁を何かしら壊したい、皆さんとこの壊滅的じゃなくとも被災、それまで私と友達だった皆さんとの圧倒的な距離感を感じていたので、そういうところを縮めるという意味でも今回参加することを非常に楽しみにしていました。昨日一日だけでしたけれども、語り部の皆さんとお話しして、それぞれまわつて一番びっくりしたのは生き残つた人たちの元気

ですね。観光協会の語り部の阿部さんにしろ、おちゃっこクラブの岡さん、それから南三陸町の高橋家の漁師の皆さん。なんでそんなにつて驚いちゃうぐらいものすごい生きるパワーを持っていて、かえつてこちらが元気をいただいってしまったと思えます。というのも、「これまでずっとずっと大変だった」ということではなくて、「これからどうやって生きていこうか」というところで、皆さんそれに向かっていつていらつしやる、というところをすごいと感じました。

皆さんのお話を聞くと、世代間の知恵の継承というのが生きていくためにすごく大切になるだろうという感じがしています。例えば生き残つ

## 身体の五感を大事にしないと死につながる

た皆さんは「身体の五感を大事にしないと死につながる」というのを被災を通して実感をされたというお話をされていきました。そして、地震があつた後、皆さんが「おじいさんおばあさんが何があつても生きられる術を知つていた。それを教わつたということ」で、全然頭が上がない」ということを言っていました。今回の震災だけではなく、昔から津波があつた所だから、地震がきたら津波が来るというのをセットで語り継がれてきた地域です。それが良くも働いたり悪くも働いた所もありましたが、そうしたことをこれからも受け継いでいくためには、おじいちゃん、子ども、孫……というつながりが今は壊滅的だと言われる都会でこそ世代間をどうやって仲良くしていったら良いのか、という部分で何か文化や芸術の力は生きていくだろうと思えます。



写真左から 鶴見幸代（作曲家）と小山田徹（美術家）

そう思ったのはBコースの皆さんが音楽を実体験したことの中にあつた五感の継承ということ、それから「つながる、つたえていく、途切れない」というのって本当に生命力と実際に関わり、途切れた時に「あ、死ぬ」という危機感を感じるという本能にあるみたい、ということとを昨日お話を伺って思いました。当時、女川町も南三陸町も皆さん何かあつた時に家の中でもちゃんと放送が聞こえるという防災無線があつたんですね。それがどつちも、さつきまで聞こえていたのにブツツと切れた瞬間があつた。それが市役所が流された時、防災庁舎が流された時だつたのですが、これで「ああ終わった」という風に皆さん感じたとい

うことがあつたそうです。あとは震災遺構のことですが、どうして残していったら良いのか。これはすごく人の想いがこもつたところなので、あのままではなくても何かしらの形で皆さんの想いを続けられる供養の、弔いの場として残していくというようなことを考えていければ良いのではないかと思います。あともうひとつ、自然の猛威と美しさ、女川もすごい美しい所で、いままで何で旅行で来なかつたんだろうと後悔するくらい良かったんです。全国の皆さんにも美しさを、東北の良さというのを一緒にアピールしながら、こうした問題についても考えていけるように活動できていたらいいな、と感じました。

## 「美味しい」というのはすごいことなんだ

がいる地域というのは強いんだと思うんです。

私たちは直接こういう被災地とか様々な地域と関係を作りながら、持ち帰るものつたつぷりあるんですよ。自分たちの地域でどう未来に作っていくべきか、もしくは明日からの自分たちの生活をどう変えていくかというヒントを考えると、この未曾有の自然災害に対して私たち全員が取り組めることなんじゃないかな、と強く感じました。「美味しい」というのは、もうすごいことなんだと。とにかく自信を持つて本当に自分もそうありたいな、と。人に食を提供したり、いろんな場を紹介する時に、本当に心の底から自分たちの心で自信のあるものというものをすすめてできる地域を、自分たちが獲得したいというのが今回の大きな印象です。

**小山田徹** Aコースは海産物の調査に行つたようなものだったんやけれど、どの出会つた方々もすごい嬉しそうに自信を持つておすすめてくれるものを持っているというのは、とんでもなく幸せな状況なんじゃないか。翻つて自分たちの地域を見た時に、外から来られた方に対して自分たちが何が出来るだろうか、自分が自信を持つておすすめてできる環境に自分たちの生活を置いているだろうか、というのを考えると女川や歌津<sup>うたつ</sup>はとんでもなく未来を見据えた地域なんじゃないかな、と思うんやね。古来ずっとそういうもので生計を立ててきて、そういうもので文化が成り立ってきた地域がたまたま被災して、そういうところが復興に際して、先ほどの老人の知恵もあり、あらゆるものを自分たちの地域で持続的に作れるものを作ってきた人々

それと美味しかったりすると顔と顔のつながりつてすぐできるんですよ。「個人の顔が見える」というのは、非常に大事なことかなと。京都にいて、三年間うちの学生たちも女川に來させていたでいて、女川の方々も「あの子はちゃんと就職できたのか」とか今回みたいに地震があると逆にすぐメールが来るんですよ。そういう関係がある限り、復興に向けた協働というのが取れるんじゃないかと。だから可能な限り顔の見える関係を作る企画というのが必要で、そのためには身体を使つたり、食べる、それこそ五感というものを通じての企画を作ることが絶対必要で、私たちが関わるべきエリアというのはそういう感じじゃないかなと思つています。

**高橋栄樹** 被災した時は自分たちが住んでいる歌津の寄木地区の人間が家が残った所にお世話になるという形になったので、多い時には七カ所ぐらいに分散して生活しました。それから震災後の夏ぐらいから海の仕事が始まり、人が寄り始めて、共同作業が始まっていった辺りから、自分たちはどの方向に向かって歩べきなのかという模索が個々に始まったような感じです。実際に初年度は水産業を元に戻そうという気持ちがある人となない人がすっきり分かれてしまっただけです。六十歳より年齢が上の人たちのほうが海の仕事を戻さなければならぬと動き始めたんですけれど、その下の年齢の人が海の仕事をしても、もともと右肩下

がりになり始めていた水産業だったので、戻すことに意義があるのかと疑問を持っていました。でも一年目のワカメの水揚げの金額を見てみんなびつくりして、二年目からみんな動き始めました。色々と段々元に戻り始めてきたら、次のステップにどうやって移行していくか、復旧で戻った後のことまで考えていかななくてはならない、自分たちの地区をどのようにも立てていくか、というのをいろんな人と知恵を出しながら進んでいる状況です。水産業をもう少し発展させるには防潮堤を高く作ったりとか、復旧だけでは済む話じゃないというものも多いですが、うちの親父が行政区長をやっています、行政との

## まず六十歳よりも上の人たちが動き始めた

擦り合わせとかで苦労はしているようです。なかなか日本のシステムの中だと元に戻すことで精一杯というか、地域の工事をお願いしてもなかなか進まない、許可が下りないというところで色々悩んでいる、そんな感じですね。

うちの嫁とは、震災があつての結婚でした。彼女も地元の歌津出身なんですよ。伊里前に住んでいたんですけど、自分の家が流されて。彼女も地元が好きで戻ってもより所がなかったらしくて、たまたま家に来ている縁で一緒になった感じです。

**小山田徹** 昨日お伺いしたときも、お父さん、息子夫婦、弟さん、お母さん、なんかこうそういう家族で家業と家庭を営む、というのいろいろな問題があるにしても、そういうものが生活の基盤にある風景というのは見ていて気持ちいい。なんか全ての

家庭がそうあるべきとは思わないんだけど、ちゃんと漁業をやっている跡取りがいるんだという風景とか、そういうもので技術の伝承がされていったり、料理の技術が伝承されていったりという、そういうことが可能な状態にあるというのが残っている。震災って悲しいことが多かったけれどこういう出会いがあったりとかさ。プロGRESSな感じがあるなあ。

**吉野さつき** ありがとうございませう。では、私のほうで最後にAコースの総括を。

震災遺構には、年内には解体されてしまうものや、保存かどうかで揺れているものがあります。それぞれに金銭的な問題だけではなくてそこまっつわる事情があり、特に防災庁舎の話はどういう経緯で建ったか、どういう風にそれまでのことがあつ



Aコース

### 丸七水産 [南三陸町]

若かりし日に遠洋漁業に従事していた社長の高橋七男さんが、養殖業を始めるにあたり寄木地区に移り住んだ。津波で自宅と加工場を失うものの、いち早く再建し、地区の復興の牽引役となっている。現在、妻の和子さん、長男の栄樹さん、次男の祐樹さんを中心に家族経営でホタテ・ワカメなど養殖業を営んでいる。



Aコース

### 歌津・寄木漁港 [南三陸町]

南三陸町歌津にある漁港。湾の中心にある小島・松島をシンボルにした小さな入り江は、台風でも波が穏やかで天然の良港といわれる。東日本大震災で15mを超える津波（※4）が押し寄せ、47戸あった住宅の35戸が流された（※5）。平成27年2月現在、地区の高台移転や防潮堤の建設が計画される中、養殖業などで港は賑わいを取り戻しつつある。



工事車両が行きかう女川町

## Bコース報告

**佐東範一** ではBコースの皆さん、

ご感想をお願いします。

**渡邊絵美** 今回石巻市の雄勝<sup>おが</sup>町で雄勝法印神楽を舞うということで参加させていただいたのですけれども、やはり見るのとやるのでは全く違います。一見すると先生方が簡単に舞われているのを—もちろん何年も続けてらっしゃるからなんですけれども—舞われているのを見ながらやっているはずなのになぜか同じ動きが全くできない。手がこうかな、と思っていると足が疎かになつたりとかですね、バラバラになつてしまつて難しさを痛感しました。また、長い間続けてこられた方々の意気込みというですか、伝承していくことの大切さというのをちよつと学んで

たか、どんな人間関係があつたかなど、そういうことも含めてのいろんなことが見えました。また、プログレスという後半のお話ですが、そういう意味では、震災の後しばらくは漁も難しいかといわれていた海が逆にきれいになつて回復してきているというお話もありました。海の底に堆積していたものも含めていろんなものが流れた結果、十年か二十年分くらい海が若返つて、むしろ今まで生えていかなかった昆布が生えはじめたり、瓦礫が魚礁になりはじめていたり、自然が元々持つている回復力のすごさというのは人間の想像力を超えるんだということを知りました。女川の遺構付近で工事車両のラッシュが起きている風景には、前に向かっている勢いも感じます。人間がいろいろものを建てたり作つたりするのはプログレスでもあるけれど、

来れたかなと思いました。

雄勝法印神楽は国指定の重要無形文化財になつたんですけれども、なつたことで「肩のしかかる重さが強くなつたなあ」というお話を聞きました。今までやってきたのはその重要無形文化財のためではなくて、奉納するために舞ってきたものが急にそういうものに型にはめられたことによつて今までと違つた雰囲気になつている、というのを感じられたのと、小学生や中学生たちに教えられていて、その子どもたちの最終目標がお祭りや奉納することですが、練習するだけじゃなくて発表する場があるというのも続けていくのに良いものを与えているのではないかな、と感じて大変良い勉強になりました。

**北本麻里** 今回の雄勝法印神楽コースに参加させていただいて、その土

ど、その時に自然との共存のことも考えながら進めていく必要がある、ということを一日の経験の中で私たちは学んだのかもしれない。

経験から学ぶことは鶴見さんがおっしゃつていた「五感の感覚を大事にしないと死につながる」「その経験と知恵を継承するということ」にもつながります。今回のように聞く見る語るということもそうですし、それから生活の中で子どものうちから色々な体験や経験の中で身の中にすり込んでいくこともそうです。

それが技術的な生きるすべての部分もあれば、精神的なことも含めた身体の経験としての神楽とか踊りもある。そんな感じでAコースの話がこれあとBコースのお話に結びついたら面白いかなと思つています。

地の人たちのみに継承されてきたものが、全く関係のないような私たちが、しかも短時間ずかずかやってきたにもかかわらず習わせていただきました。その人たちに体と体で対話ができた時間を作らせていただいてすごく良かったなと思つていて、すごい可能性を感じました。

その半面、今回のような取組みに参加する人が少なくなつてきているのかなと気になつています。私は普段は京都にいて、きつかけとか、どういふ風に来たら良いのかなと考えていたんですけれど、私だったら仙台駅に来てバスに乗れば被災地に行けるというのつてすごいいい機会だな、と思うんです。その可能性と共に風化なのか、たまたまなのか分からないですけど、その部分も今後いろいろ考えたいな、と思つています。

**佐藤李青** 今回訪問した法印神楽のほうは二〇一一年に、仮設の舞台を作るのをちよっとお手伝いさせていただきました。法印神楽自体は情報として知っていたり、舞うのを見たことがあったんですが、実際に習ってやってみるとかなり見え方が変わりました。これからは「あの足の動き」「あの掛け声が出た」みたいな見方になるんだろうな、と思います。

個人的には、その後の舞台はどうなったのかを直接お話を伺えたのは大きかったと思います。舞台ができて「使っているよ」「すごい良かったよ」と話を伺いながら、いろんなことを思い出しました。一番始めに10・BOXの八巻さんから法印神楽を聞いたことや、舞台ができて舞う現場をみたとか、情報は忘れてるんだけど、そのポイントポイントの事は覚えている。過去のことを思

心の支えになったそうです。文化は支えになるんだな、単純に言っちゃうとそんな話なんですけれど。そういうものの一端に触れて、はあ、と思いました。すみません、こんな感じのことをぐるぐる思いながら昨日はお酒を飲みました(笑)。

**森隆一郎** 東京に今住んでいます。三年前までは福島県いわき市にある劇場で二〇〇七年から二〇一二年まで五年間働いておりました。震災も福島で経験しました。震災当時は福島のこと、精一杯で、岩手とか宮城はテレビでしか知れないので意外と被災地同士の横のつながりってなかった、と思います。改めてこうやって来る機会ができて初めて画面としてではなくて時間として見えてきた感じがあります。

震災前からアサヒ・アート・フェスティバルというのがあって実行委

い出す良いきっかけになったなという意味で、楔を打つみたいな良い経験になりました。もう今回のことは忘れないだろうな、と思いました。

**奥麻実子** 舞を教わるのはすごい面白かったです。ずっと中腰でやっていたので今朝起きた時にめっちゃ足が痛くて、でも楽しかったです。ありがとうございます。昨日舞を葉山神社でやらせていただいて、神社が再建する前からお祭りや神楽が望まれていたこと、その二〇一二年の五月にはもう舞台ができていてそこで舞われていたこと。場所よりも先にお祭り、文化が心として望まれていたんだなということがとても印象的でした。

個人的な話ですけども、震災でまだ地元に戻れないという知人が、避難した先でも地元のお祭りをその場所でもやったりしていて、それが

員として関わっていたのですが、災害が起こった時にそこで知り合った東北の人たちが「どうしているかな、今」とか「あの人が大丈夫で安心した」とかそんな関係性だったのをすごく思い出していました。そういう市民同士のつながりや、日常からネットワークが作れている状態があると、お互いを思いやったりとか、乱暴な議論をしないようにするとか、非常時にすごく効くような気がしています。そういう普段のネットワークというのは文化のジャンルが一番やりやすいと思うんです。他の領域だと、経済的な交流とかなかなか市民レベルでは難しいと思うんですが、それが趣味とか文化とかいうジャンルであれば普段からできて、それが災害時にも有効なネットワークになりうるな、という実感を持っています。



Bコース

**葉山神社 [石巻市雄勝町]**

石峰山に鎮座する石神社の里宮。薬師堂として鎌倉時代に建立され、古くから海上交通と漁場を守護する宮であり、漁師から崇敬を集める。明治初年までは羽黒派修験者により祭祀が行われていた。代々千葉家が宮司を務める。津波で全壊した本殿は、再建を目指し建築中。(2015年2月現在)



Bコース

**雄勝法印神楽 [石巻市雄勝町]**

宮城県石巻市雄勝町に約600年前から伝わる神楽。1996年、国の重要無形民俗文化財に指定された。法印=修験者が三陸地域に広めたとされ、かつては一子相伝の口伝で傳承されてきた。仏教の所作や湯立ての神事など古来の神仏習合の系統を残す。通常各地区の神社の例大祭で奉納されるが、町内外のイベントでも演じられる。

(写真提供：雄勝法印神楽保存会)



演目「初矢」を習う参加者。雄勝法印神楽の冒頭に演じられる天地創造の物語であり、すべての舞の基本となる。



雄勝湾

今回神楽を習ったことでそれがより身に入った。これが被災地支援に何の関係があるんだという風に思われると思うんですが、ただ見るだけじゃなくて一緒に踊るといふ行為、身体に入るといふのはすごく効くな、と感じることができました。

**山口紀子** 今回自身は被災地に来たのは恥ずかしながら初めてで、実際にはわずかな募金をする事しか関わっていなかったと思いましたが、この機会に参加させていただきました。

大川小は新聞報道など目にしていましたが実際の遺構は胸を打つものでした。現時点では今後どうするかということも決まっていないうし、このままでもいくとたぶん倒壊してしまう状況も分かりました。遺族の方には見たくない方もいらっしゃるかもしれないですけども、慰霊碑も二

カ所あって、何らかの形で残しておくことに意味がある場所ではないかと個人的には思いました。

自身では伝統芸能の仕事をしておりまして、行政からの支援がそれなりにある中で、都内の伝統芸能の団体の皆さんは自身の伝統芸能の保存、普及、人材育成について日々考えていらつしやいます。今回雄勝法印神楽を拝見し、阿部さん、千葉さんからお話を教えていただき、この震災で法印神楽の方向性が若干変わった部分もあるかもしれませんが、将来的にいい方向に進んでいると思います。なかなかきちんと舞えなかったたので、筋肉痛には全くなっていない状況で（笑）、申し訳ありませんでした。

**竹井真理子** すみません、昨日ちょっと体調不良で参加できなくて、本当に残念な気持ちです。私は仙台市

宮城野区で震災を体験された方の文集の朗読会というのをしております。二十一日も中学校で中学一年生と地域の二百五十名位の方たちとともに震災の体験を聞いていただきました。自分は体験していないのにもかかわらず体験しような話をするという後ろめたさ、というのがあるんですけど、中学生は本当に真剣に聞いてくれています。聞いた後の表情

というのが全然違いますので、決してその風化が自然に起こっているのではなくて、語る人がいなくなるということもあるんじゃないかと思えます。私はこの後どのように語っていけば良いのか、ということを知りたくて参加したかったです。今日はいろんな話を聞かせていただきましたと思います。よろしくお願いいたします。

## 汗をかいて時間を共有できた感覚が、「被災地」の冠が取れた時にどう芽吹くか

**佐東範一** ではBコースに随行された阿部さん、ミロト、藤さんからもお話お願いします。まず阿部さん、一般の人に教えられるのは初めてだったということでしたが、受け入れ

てどうでしたか。

**阿部久利** 今回こういったご縁があつて、雄勝以外の地域、特に遠くに住んでいる方々の参加で神楽というその三陸沿岸に伝わっている伝統芸

能を指導するということになったのですが、すごい新鮮だったんですよ。こういった体験ってほとんどしたことがなく、教える側からしたら、九十時間かかるカリキュラムを四時間でどう教えるんだ、とそういった流れになるんですけども。体感して知ってもらおうというのはすごい良いなと思ったんですよ。

それで筋肉痛になったと聞くと、おおそれは良かったなと思いますし、何か体にすり込んでもらったという。被災地というネーミングでそれをブランドにもしてほしくないし、差別用語にもしてほしくない。そういった中で一緒に汗をかいて時間を共有できた仲間というような感覚というのは、すごい良かったなと思うんですよ。そういった活動が「被災地」という冠が取れた時に後々にどういう風に芽生えていくの

かっていうほうがむしろ私としては楽しみです。そういう体験ができて指導者としてすごく嬉しかったです。

マルチナス・ミロト まず一つは大川小学校を見て少しトラウマを感じました。二つ目は精神的なもの。それは神楽に触れて、精神的なものをすぐ感じました。神楽の舞を経験したことによって貴重なものを得ることができました。

芸術作品の中には精神的なもの、トラウマ的なものも出てきます。その中で私はトラウマを受けて内面にある精神的なものと向かい合ったアーティストはどのようにこれから作品を深めていったり、作っていったりするのだろうかという問いが湧きました。というのも、アーティストであるからにはトラウマを克服して、より精神性の高い作品を作っていくというのが課題になっていくか

らだと思えます。

たぶん大川小学校については外から来た方が見られて、こんな大変なことが起こったんではないかと思える場所としては適当ではあるとは思いますが、トラウマを生じさせ

るという意味においては残すべきではないと考えています。最後に大川小学校を残すべきかどうかについては、よその人があれこれ言うのではなくて、その地元の人たちの考えを優先すべきだと思います。

## 白か黒か。アーティストの立場には「虹色の答えを出す」というのがある。

藤浩志 二〇〇五年に神戸の震災十年事業で、まさに、忘れないためにいろいろなワークショッププログラムを立ち上げた経験があって、その時に考えたことを思い出しています。僕自身が今ここにいるのは、生き延びた経験が何回かあるという証です。いざとなった時、ルールを破って、例えば一方通行を逆走して坂

の上に登るとか、時には人には言えないようなことをしても生き延びなければならぬ現場に立ち合ってきたということですね。その結果皆さん生き残っている。当たり前の話ですが、こういう記録とか記憶の話は生き残った人からしか聞けません。強い発言力のある人の声が残りがちです。しかし僕らは亡くなった方



A・Bコース

### 石巻市立大川小学校 [石巻市]

旧河北町立大川小学校として昭和60年建設。鉄筋コンクリート造2階建て。東日本大震災では追波湾の湾奥にある新北上川（追波川）河口から約5kmの距離にある同校を津波が襲い、校庭にいた児童108名中74名と、教職員13名中、校内にいた11名のうち10名の死者・行方不明者を出した。

(※6)



Bコース

### 雄勝法印神楽保存会 [石巻市雄勝町]

法印神楽の保存と伝承のため、旧雄勝町出身者を中心に会員22名で活動（高橋幸一会長）。震災で衣装や道具のほとんどを失うが、東京都などの支援によって再開に至る。特に引継ぎ手となる小中学生の指導に力を注いでいる。

(写真左から 保存会会員の阿部久利さんと葉山神社宮司の千葉秀司さん)



写真左から ナビゲーターの佐東範一と吉野さつき、藤浩志（美術家）

の、もしくは弱い声の、そして語れない事を、想像力を発揮して、語らない人から聞くことが大事だと重く考えていました。世の中の記録、記憶は強い意見によってしか作られていないと心ずべきだと考えていました。その結果として「イザ！カエルキャラバン」という防災プログラムを立ち上げ、「プラス・アーツ」というNPO法人をつくり、いまは海外でも防災教育を拡げてゆく活動をやっていますが、当時そういうことを重視していました。

だろうと感じていました。今の社会を作っている常識とカールが脆弱でフィットしていないことも修正して行かなければならないこともあるでしょうし、もっと体の中に組み込む記憶としての体験を作っていくことも必要で、そのプログラムをどう作ってゆくかが重要だと思っんです。

り、自分の行動を無意識に制御している。それを越えて「ポキャブラー」を増やしてゆくことが防災教育につながる。足で「八十八を切る」とか、これまでやったことのない行為が自分の中にある遺伝子呼びび覚ますことに意味がある。まさに「無形」文化財です。昨日の体験で非常に象徴的だなと思ったのは、ぼくら無形文化財を体験しにいったのですが、それを行うための舞台を震災後に作っていった話を聞いたり、神社の本殿が建てられていくのを横目にしながら舞った。無形を体験しながら有形の話を聞いていた。逆にAコースの方たちは震災遺構など有形のものを体験しに行きつつ結局海鮮丼の味や海の文化など無形の話を感ずることになった。有形をどう残すかという話も無形の話になるところに妙な関連を感じました。

実を言うと女川など遺構のツアーにも興味があり、そっちのほうが僕としては意見を言えるのかなと思っっていました。行っていないのに感想をいわせてもらえば、白か黒かと答えを求められた時に、アーティスト的な発想としてはどちらでもない色の答えを出す手法があるということなんです。一般的には、白でもなく黒でもないとするけれど、僕らが答えを出すとすれば「虹色だ」と言う、「白でも黒でもない虹色ですよ！」と言う。混ぜればグレーになるんだけど（笑）。そういう答えの出し方をしたいと思うんです。

山にすればもっこりした山ができる。中に建物が入っている古墳みたいなかんじ。千年後に発掘することを見定しているようなものを埋めてみるとか。そのように千年後の人たちが発掘できるような状態を作るのもありかな。もうひとつの防災庁舎のほうは、あのフレームを残しつつ全く新しいフレームをその中に組み込んで作ってリノベーションしてしまう。一見新しい建築物に見えても、そこに古い防災庁舎のフレームがそのまま残っているようなスマートなりノベーションの作り方もあるのかな。これが虹色の回答じゃないかなと思っっています。絶対に残すか壊すかという話じゃない。虹色をつくる素材にするという発想が大切だと感じています。

## 災害から新しい関係をつくる

**佐東範一** 僕が一番始めに被災地に入ったのが二〇一一年四月十二日、ちょうどえずこホールで二兎社の演劇の公演があった時に来たんです。が、途中の高速パーキングエリアに警察、自衛隊、消防、NGO、あらゆる車が停まっていたんですね。その時に「この人たちは何か目的を持っていくのに僕たちは見に行くのが目的だ。本当に文化芸術が何ができるのだろうか」と思いました。それを模索しながらずっとこの三年来てました。もしこういうことが今後未来あった時にどう活かせるか、ということについて今回感じたことや、提言や意見などいろんな視点からお

伺いたいと思います。

**藤浩志** 新しい関係を創り出すことが重要だと思うんですね。今までの関係もあるんでしょうけど、そうじゃない全く新しい関係を創り出すことかなと。僕は「文化芸術」という言葉に縛られるのがすごく嫌なので、そういう重石をどう取り除くかがテーマだと思うんですけど、逆にもつと人間の能力を見つめ、人間には何ができるのかという問いが重要な気もするんです。これは防災の話とも関わります。災害は非常に大変だけれども、防災のプログラムは魅力的で楽しくなければいけないと考えていて、人の興味関心を引き寄せるものでなくていけないと思っております。それをいかに地域に定着させるか。文化芸術だけではないと思いますが、地域の魅力、興味関心を新しい視点で引き出すことが重要で

す。災害全般に言えることですが、

災害によって、あるいは事件、事故によっても、これまでの関係が崩れたり断ち切れたり、傷ついたりするわけですが、さっきの虹色の発想で、これまでの関係とは全く異なる新しい関係をどう創り出し、その傷に手をあて、関係を結んでゆくのが大切だと思うんです。そこに僕らの役割の可能性があると思うんです。

**吉野さつき** 今のお話を聞いて、震災や被災地の復興のこれから、ということだけじゃないのかな、と思っただけですね。防災のことは、他のいろんな地域、自分がこれから戻っていく場所に持ち帰って、結びつけての「これから」として考えることをいま話していただいてもいいのかもかもしれません。「被災地のこれから」だけではなく、広い意味での「これ

から」という話も出たらいいかなと思います。

**小山田徹** 一番最初に来た時に泊まる所がなくて、キャンプもしくはキャンピングカーで来て、被災地の一部を使わせていただいて、そこで焚き火をするんですね。焚き火しているとわらわらというんな方々が寄ってきてくれて、様々な話ができる。なんか対話の場の作り方というのをいろんな形で、行政も含めていろんな団体が行なおうとしているけど、例えば会議室もしくはプレハブの会議室、そういうところで「対話しましょう」というてもなかなかいい話ってでないよね。本当は今日もそうです。工夫してなんか顔が見える関係を作ろうとするけど、対話というのは行なわれるのに一体何が必要なのかというのを考えると、それは震災に関わらず自分たちの生活の中で

どういうことが行なわれるべきなのか、という指針になると思うんですよ。例えば昨日の、飯を食いながら、もしくはその地の特産品をいただきながら喋るといふ時の「喋り」の内容と、デスクの上での「喋り」は全く違う。太古の昔から人々はいろんな方法を編み出してきていると思うんだよね。各家庭の食卓であるとか。地域の方々のその、神楽のそういう伝承の場というのは関係性を作る部分で語りの場でもあるんだと思うんだよね。僕も藤さんと一緒にいつもそういう所では「文化芸術」を外そう外そうとするんだけどね。ただ単に焚き火がしたいだけやねん(笑)。でも本質的なところというのはいかに創出するというのはいかにできるか、もしくは再発見というのをいかにできるかということに掛かっているような気がします。

## 「安全」をカンがえる

**小山田徹** あの、歌津のほうとかはいま焚き火つてできるの？みんな普通にしてる？

**高橋栄樹** しちゃいけないんですけど、やります(笑)。燃やすものをみんな持ち寄って焚き火が始まりました、というのはあります。ひとり作業してると、みんな集まってきて「何してだの？」と始まるんです。それで情報交換が始まっていくんですけど、震災後もそうでした。寒いので暖をとるために焚き火をする人が寄ってきてあーだこーだ、今度あーしようかこうしようかと進めるのに集まるのにはいいのかな、と。  
**小山田徹** 女川でも多くの方が口にしていたのは、震災直後の避難所やグラウンドでガンガンみんな焚き火



写真左から 参加者の近藤穂波さん、竹井真理子さん、宮崎里子さん

をしていると自然とそこが会議の場所であり、仕事分担の場所であり、子どもの遊ぶ場所であり、いろんな機能を焚き火の周りが持つていた。仮設住宅に入り始めると火気厳禁だし、それぞれが個別の時間というものを持てるようになった瞬間に代表を集めて会議をしなければいけないとか、伝達をわざわざしなきゃいけないというような事態となった。更に復興住宅ができていくと連絡の取り方に非常に困難を感じ始めてると。一番単純だった焚き火っていう場所とか、飯を食うという行為が分断されていくことというのが果たして都会化、もしくは通常の生活化っていうものとの関係がどうなっているのかなというのをなんか工夫しなきゃいけないのかなと思う。特に都市部においては今完全に焚き火ができない。震災が起こる以外、たぶん

そうこうことなかなか起こらないよね。もしできないとしたら替わる何かを發明できるかどうかなど、なんかそういうところにいるんなこちらから持ち帰ったものから自分の生活の中に入れる何かがあるんじゃないのかなと思っています。

**森隆一郎** 火を閉じ込めるのが二十世紀の文明だったと思っていて、その最たるものが原子力発電所だと思うんですね。危ないからコンクリートで閉じ込める。何となく火を囲っておけばって、ちよつと古臭いと思うじゃないですか。これからはちよんと出ているで大丈夫にしておく技術、それはたぶん人の知恵だと思っんです。その見えない力みたいなもので火をコントロールする。人類の歴史って火をコントロールする歴史だったと思うんですよ。ソリューションとか、ソフトパワーと

いうとちよつと違うかもしれないけれど、人がそれをコントロールするんだという新しい世界が出てくるんじゃないかと思っっているんです。じゃあ何をきっかけにそれをそういう風にするのかというと、こういう震災が起こった場所というのは一回裸になっちゃったから、もう一回そこからやり直せるような気がして、そこで何を言い訳にして火をむき出しにしておけるのかというと、こじつけかもしれないけれど文化的な催しや、文化的な事業がそういうものと接せられる言い訳にはできるかもしれないな、とちよつと思いました。

都市の問題でいくと一番今見てて笑っちゃうぐらい規制だらけなのが公園ですね。都市公園でもできないんですよ。ボール投げちゃダメ、犬は遊ばせちゃダメ、自転車もダメ。何する所ですか(笑)という状態で

す。それをみんなで笑うということから、行政も市民も考え始めないと。それは行政側だけに問題があるのではなく、最近小学校とか幼稚園がうるさいって市民からクレームが来る。学校なんだから当たり前じゃないかと思うんですが、そういうところに行政がひとつひとつ応えてしまったがために変になっちゃったというのをたまに戻さないといけない、と今思うことでした。

**竹井真理子** いま焚き火のお話をお聞きしていて、火をコントロールするというお話だったんですけど、私はまた文化芸術の中に別の一面があると思っっています。自分は主婦なもので付き合う方も主婦が多いんです。主婦はだいたい日常の中に埋没しています。自分の中にエネルギーがあるということには気がつきません。それが震災とか非常の時

に発揮されますね。すごくて。人々のためにアルファ米で千人分作るとか、水をどこから集めてこようとか、とても発揮されるんですけども、それがまた過ぎますと日常の中に戻ります。ただ文化とか、私の朗読会などに出た時に違っていたり聞きていただいた時に違っていたり聞きますね。子どもたちもそうです。

「あ、こういうこの自分の心の動き」とか、日常の中で規制され殺されてしまっていたエネルギーが出てきます。例えば神楽などでもそうだと思います。舞うということは日常では無駄なエネルギーだと思っんですけども、舞うことで自分の中に埋没していたエネルギーが生まれ「ああこういう力もある。こんな感情もある」っていうようなことが蘇ってくる。それが生きる力となって、ひとつの自分の中の蘇りの力というきつ

けになることがあると思っております。そうなってくれればいいなというも思いながらお話しさせていただったり、またみんなと一緒にやろうよと言って呼びかけたりしています。祭りっていうものがそういう力があるんじゃないかなと思っております。ちよつと違う方向から言ってみました。

**海子揮一** 都市公園の話が出ましたけれど、今の現代社会の中で「安全」という意味が空洞化しているのかな、と思います。昨日の歌津の防潮堤の話でも、危険とされる浜辺という所が実は豊かにいろんなものをつないで生み出している。これは他

## 焚き火みたいな共同体験や作業を いかにつくるか

る時になんか文化芸術というのが外から何かを持っていくことではないんじゃないかな、と思い始めました。

その東北に、岩手・宮城・福島だけでも郷土芸能が二千ぐらいの団体があるという話を聞き、たまたま後継者がいないところと出会いました。逆に僕たちがダンスであったりプロの振付家など体を動かす専門家であるならば、そういうことを習うことで外につなげられないかなというのを思い、一番始めに盆踊りを習うというのを入口としてやりました。その時に思ったのが今まで何かしなきゃ、と肩に荷物を乗せているような感じでいたんですが、習うということを始めたら一気に肩の力が抜けたんですね。出会っている中で教えてもらおうということ、昨日体験した方は分かると思うんですけども、そういう中でまさ

のことにも当てはまるんじゃないかなと思っております。そういった安全といったものへの考え方には、自分たちの日常の身体の延長線にあるかどうか、がキーワードになるような気がしています。

また身体というところというところ「被災地」から距離がある人にとつては「そこに住んでいない」ということが隔たりを生み、理解を妨げることが往々にあります。私自身が女川でつなぎ役としてやってきた三年間というのは、現地に来てもらって共同体験、共同作業というもので一緒に何か、焚き火をするのもいいですし、そういった何かをする

いうことがいろんなものを越え、生み出してくれました。そういう共同作業というものをいかにつくるか、というのがこの三年間で価値を感じたことでした。

### つなぎ、つむいでいくこと

**佐東範一** いまの延長線の話になるんですけども。僕はジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク（JCDN）でダンスの制作をしております。一番始めはダンスのアーティストを被災地の避難所だったり仮設住宅と一緒に行って、避難されている方々と一緒に体ほぐしの体操であったり、ダンスというよりはどうやって体をほぐすかということをやりました。体がほぐせば心もほぐれるという形でいろんな所に行ったんですけども、ただあ

と一緒にやるようになり、「習いにいくぜ！東北へ!!」というのを始めました。そこから発展して今年の八月に三陸国際芸術祭というのを地元の人たちと一緒にしましたが、そこで思ったのがその土地にある文化芸術をどういう風に外の人間がつかないでいくのかということでした。僕の役割というのは、先ほど出たように「つなぎ手としての役割というのが『できる』ことだ」と思い、今は全

国やアジアのそういうことに興味がある人はいかにつかないでいくか、という所をやるようになっております。

**吉野さつき** 今は愛知県の豊橋というところにおりまして、そこは外国人の移民の方がたくさんいるんですね。日系ブラジル人もそうですし、それからフィリピン、インドネシア、あと中国、ペルーとか。トヨタのお膝元だから下請けのいろんな工

場とか、小さな会社とかいっばいあるというのもあるんですけど。ただその中でいろんな移民のコミュニティが今のところは大きな衝突はなく共存しているようでいて、でもそんなにお互いに触れ合ってもいない。ある地域はものすごく外国人の移民の小学生とかが多いんだけど、ある地域は全然いないとか。その人たちはその人たちのコミュニティの中である程度完結するような状態になっている。

豊橋も南海トラフ地震があったらかなり被害が出るであろうと言われてます。そこに文化的に多様な背景がある人たちがいて、ある種の緊張感がどこかに内在しているような地域でもし何か起きたら、と思うようないろんなことを考えちゃうんですね。そのことと昨日と今日ここで見聞きしたこと、日常でそういうつな



写真右から 高橋栄樹さん、高橋香緒里さんご夫妻

がりの場があることがどれだけ重要かということ、という風にもって帰って活かせばいいのか。それからここで起きてきたこと、それをつなぐような具体的な交流の場や時間をどういう風につくるのか。私も文化芸術という括りに特に縛られすぎず、なんです、でもそこはとにかくりではあるので、つなぎ手としてどういう風にならなければならないか、ということ、ここにいる人たちの他にも他の地域とのつながりに興味がある人がいたら一緒にできたら良いなあと思っているんです。

**鶴見幸代** そのつないでいくこと、というのが、先ほど私も話したように、地域と地域もそうなんです、世代間の交流というのが私結構大事だと思ってるんですね。それで高橋さんのお家もそうでしたけれども、世代間でいろんな知恵が続いて

いる所が強かった。生き延びられたということ、すごく大きなことだと思ってます。

でも、長い目で見るとこういう大きなショックがあった時に、携わったその世代の人たちというのは、なかなか次の世代にバトンタッチできない。その時に頑張り過ぎちゃったがために、例えば今三十代二十代の人々が復興に向けて頑張る、いろいろなお祭りを考えたりとか、いろんなことを率先してやっていかなければいけないという責任感で、それが七十七歳になっても八十歳になっても俺たち現役で、なんか若いやつがいうことなんて聞いてらんない、まだまだ未熟だからもうちょっとお前ら勉強しろ、みたいな感じで偉ぶっちゃやうという傾向があるのが、いま私がいける沖繩で起こっていることです。戦後とか日本復帰後の時に頑張り過ぎ

たお年寄り、いま沖繩は長寿県ですけど、食生活のヘルシーなこともそうですが、かつて頑張ったエネルギーが未だに残っています。でも次の世代に伝える術、努力、知恵みたいなのをあまり皆さん考える暇もないまま突っ走ってきちゃった。というのがあるんじゃないかな、と住んでいて思うことなんです。それが自治体であっても、文化芸術団体の、例えば舞踊とか伝統芸能の団体に関してもそうです。

でもだいたいあともうちょっと五年とか十年位すると、その頃の世代の方も亡くなるので、だいぶ違うよいうことになるんじゃないかなという気もしているんですが(笑)。それでその焚き火だったり、いろんな世代の人がいろんな話を聞いてあげると、オープンマインドになれるという環境は私も大賛成なんです。という

ことで、どうすればいろんな年代の人が一緒に動けるのか、というのを私もこれから考えているんな所でそれが作品においても、イベントであっても、単なる自治会の話し合いであっても、皆さんに積極的に提案していきたいことだなあと思いながら皆さんのお話を聞いておりました。

### 「術」を引き継ぐ術

**小山田徹** あの、神楽って地域の子どもたちへの伝承というのは、その神楽の祭りに取り込まれているものなんです。それとも努力しないとなかなか伝授できないとか。

**阿部久利** 取り込まれているという感じがすり込まれているというか、そこまで含めて生活の一部、文化の一部になっていて。文化芸術が持ちうる力というのは、結局世代間を超えて

その地域をひとつのものに結びつけるというものはあると思うんです。なので子どもたちには教える、というスタンスではなくて、自然と学び取り込むという感じですね。

**小山田徹** では、ある一定の年齢になると、なんとなくそろそろかな、と思うような空気が子どもたちの中にもあるということですか。

**阿部久利** そうですね。

**小山田徹** 例えば多くの人々は漁業のあり方とか知らないんだけど、漁業の技術の伝承ってどこかでお父さんから教えられるというのがあるのか、「俺船乗るわ」いうたらそのうち盗んでいくものなのか。どんな感じ？

**高橋栄樹** あの、漁業の技術というものは、親父の背中を見て覚える、というのが一般的です。手取り足取り、漁師の親が教えるとい



採れたてのワカメを加工する高橋栄樹さん

うことはないです。どこの家も、親父は息子に教えません。でも近所のおじさんたちが教えてくれます。海で仕事をしていて必ず船がすれ違う時、挨拶するんですよ。手挙げてもらって。スクリュ―にロープが絡まって立ち往生している時に手を振ると助けてくれたりとか、連絡網はちゃんとしてる。海岸で仕事していても、例えば自分でホタテの仕事をしている時に「もう少しこのほうが楽だよ」とか、「こういう方法がいいよ」、「今だとこんな風な水温だからもう少しこうしたほうがいい」というのは周りとのコミュニ

ケーションでいろいろ教えてくれることが多いです。

**小山田徹** すごい面白いね。それ。

**高橋栄樹** だから「親父が教えてくれねんだよね」とだいたいどの息子たちもいます。

うちの親父も自分には何も教えてくれない。でも浜に下がっていと隣のおじさんが「おめえそうでねえんだ、そうでねえんだ。ロープの結び方そんなだったら解けつぺな」とか、「この結び方では固くなって解けなくなつぺな」と簡単に言ってくれたり、「こういうほうが良いんだと、あーのほうがいいんだ」と聞いて、その

## うちの親父はなにも教えてくれませんが、でも近所のおじさんが教えてくれます。

中で例えばホタテやカキ、ワカメなどその種類によってどの結び方を使ったらいいか、どの方法を使えばいいかは自分の選択肢で覚えていく。その技術のレベルで水揚げ高が変わってくるのでみんな一生懸命覚えたり研究したりしていきます。

あと、伝統芸能という訳ではないんですけども、大漁唄い込みを歌う「ささよ」というのが無形文化財であるんですけども、それは男子のみの小学生と中学生だけで行なわれる小正月の行事なんですよね。そこでは船の中の仕組みとも似ていて、リーダーになる資質、つながりとか上下関係とか、いろいろ絡んでくるものがあります。正月の七草が終わってからなので一月七日過ぎの夜六時くらいから集まるんですよ。八時ぐ

Aコース

### 寄木のささよ [南三陸町]

南三陸町歌津の寄木地区の男子小中学生全員が参加する。歌のはやし言葉「ささよー」から名付けられたという。大漁旗を先頭に港を出発し、家々の玄関で9番まである歌を歌う。町無形民俗文化財に指定されている。

(写真提供：高橋栄樹さん)



らいまで練習と称して夜遊びが始まるんですよ。あんまり時間がかり過ぎて、毎回怒られるというのが一週間ぐらい続くんです。お兄さんたちに教えられ、それで歌を覚えます。

しかも大漁唄い込みをやる時というのは、自分たちの船名を掲げた大漁旗を湾の中に係留している船まで取りにいかなきゃならないんですよ。それを中学校二年生、三年生が船を勝手に運転して取りに行く。それが普通だったんです。海と接するというのが小学生、中学生だとしても当たり前。それが例えば釣りにいったりする時に派生していくんです。当日は四メートルぐらいある旗なんかを各家に担いで歩くんですよ。四十何軒運ぶんですよ。それができ



写真左から 小野田照子（通訳）、マルチナス・ミロト（ダンサー）、北本麻里（JCDN）

んですよ。中学校三年生になると大将が唄い込みで回ったときのご祝儀を全部自分で預かって、四人ぐらいで個室に入って、「一年生が五百円、二年生が七百元ぐらいだな」というので分け前を分け与えるんです。その人たちの采配の仕方を自ずと覚えていくというのが地元の仕事の前身です。それが大人になると今度、浜のおじさんとかお婆ちゃんが教えてくれるというのにつながってくる。二十歳で水産業が始まると三十の人たちが「こーでね、あーでね」という風に教える。三十の人たちが四十の人たちに「あーだど、こーだど」と言われるのと同じになってくる、というのは浜にはあります。

### トラウマと伝統芸能

**マルチナス・ミロト** 高橋さんと阿部さんに質問があるんですが。

先ほどの質問で、文化と一緒に担う自分の地区の方たちが何か地震と津波によってトラウマ的なものとか影響を受けたようなことはありませんでしたか。

**高橋栄樹** えーと、ありません。というのは、私たちの地区、水産業、漁師さんの中では台風とか、津波とか来て収入がゼロになるのは当たり前、というか、自然にはかなわないというのが前提条件なんです。それで被害を受けたとか、家が流されたで、少々のことでは崩れません。目の前に収入があると突っ走るので（笑）。海に出れば何とかなるな、という話に

なってくるので、気にしていないです。それが全てです。

**マルチナス・ミロト** 例えば地区で津波が起こらないように祈るような伝統芸能とか、そういうものを大きな津波や地震にあって新しく作ったりということは？

**高橋栄樹** 今のところないです。伝統的にやっているもの、地区にあるものを存続させ継承していくということはしていますが、新しく創り上げるということはしてません。

**阿部久利** 我々も高橋さんと全く同じなんですよ。というのはベースにあるのはうちのほうも養殖

業の町なので、海に対する恨みつらみというのも特になくて、昨日バスの中でDVDご覧になった方もいると思うんですけど、その中である神楽師が「海は友達みたいなものだから」って言いましたよね。彼は漁師なんですけど、それってというのは、めっちゃ仲良くなることもあれば、喧嘩することだってある訳ですね。そうやってお互いリスペクトしながらやってくし、侮れない存在だということもちらん知っています。津波程度で揺らぐようなものではない、ってことです。

**佐東範一** ありがとうございます。

海は友達みたいなもの。  
仲良くなったり、喧嘩することもある。

**佐東範一** ではそろそろ時間なので、水戸さん、森司さん、最後に終盤のまとめをお願いします。

## 「生きる」ための文化芸術

**水戸雅彦** 文化芸術は何が出来るか、その話をしたいと思います。人というのはたぶん、生きるか死ぬかというところにいけば、当然全てのエネルギーを生かすために使うことになると思うんですけども、その次の段階になった時に、人はいきいきと生きるための「何か」が絶対必要だと思えます。それを文化芸術と言わなくていいと思うんですけど。そのいきいきと生きるための「もの」は何かというと、わくわ

くしたり、どきどきしたり、うきうきしたり、楽しかったり、感動したり、そういうものだと思うんですけど、文化芸術がなぜ起こったかというと、そういううきうき、わくわくするものを作っていく過程で自然に生まれてきたたくさんのおみやげ、それが文化芸術そのものではないかというふうに思います。で、それが人と人というのは楽しくないし、豊かになれないんだと思います。そこが重要なポイントです。お金を一杯稼いだからといって、それが豊かさには直接的には繋がってはいない。ものをいっぱい手に入れただからといって、直接的には豊かさ

に繋がっていかない。豊かさとは人の心の中で「私は本当にこんなに楽しくて、幸せですばらしい」という実感を持っているかどうかだと思えます。そしてそういった実感に向かうためのほとんどが、広い意味での文化芸術に結びついているのだと思います。特に今の日本では、お金がある人、あるいは時間的に余裕がある人が文化芸術をやっている、と未だに言われるんですけど、そんなことはありません。生きていくということとは常にそういうものが必要なんです、と思っています。で、そのことはまさに今の阿部さんと高橋栄樹さんの話の中に、地域と人に密着して

## いきいきと生きる「何か」が作られる過程で文化芸術は自然に生まれてきた。

そのまんま現れているものじゃないかという風にして聞いていました。

**森司** 水戸さんが話してくれたこと

が全てだと思えますが「文化芸術」を重く使わない、と言わなきゃいけないことに対する疑問をあえてぶつけてみます。我々は「文化芸術」という言葉を使い、プライドをもって仕事をしています。日常の中に文化芸術をどうやってもう一回入れるかということ藤さんは実践しているし、今日この場にいる人たちはそれをひとつのミッションであり価値と捉えていると思います。で、そう思っている人たちが文化芸術という言葉で棚上げする言い方をしなきゃいけない現実に関して、僕はもっと言うべきだと思っているんですね。もっと文化芸術に関わり、自分のことと思う人を増やしたいし、そのことによって文化芸術が持つてい

る機能、役割を共有する人が増えることによって何か違うフェーズに入るだろうと思っています。

今回のこのツアーも「東京都の復興支援のプログラムの中で何を提供できるか」という前に、もう一度現場を見よう、もう一度考えようというところから、水戸さんがこういうプログラムを作ってくれました。先ほども会議をこの場でするのは似合わないよねってなったように、現場に行き、現場で考え、現場で語るということは、兎にも角にも日常の中でその作業をしていくこと、だと思えますね。その時にファシリテーターとしてのオピニオンリーダーがいるんじゃないかと、焚き火をしなから、魚の話をすると同時に文学の話をし、哲学の話をし、宇宙の話をするようになればいいんじゃないかと聞いていました。



写真左から 森司（東京文化発信プロジェクト室）、水戸雅彦（えずこホール所長）

今僕が喋っていることって、とてもなくでかいテーマだと思つています。一人でやると「大変すぎてやめとこう」って思う話なんですよ。とっても大きい話だから仲間がたくさんほしいし、たくさんやる仲間が疲れたらお互いが慰め癒し、お互いが鼓舞するみたいなことをする。それを考えると、もつと多くの人と関わって、もつともつと多くの時間とエネルギーを使つていいフィールドなんだけど、「文化芸術はお金にならないし、不要なものはやめておけ」というんですよ。僕はそうじゃなくて「いまこそ文化芸術はやれ」と、「大いに参加せよ」と。みんなでやろうっていうメッセージを送りたいと、いま本気で思っているんで

## いまこそ「文化芸術」をみんなで作ろう

すが、たまに気持ちが折れそうになるので、今回はこういう場に来てエネルギーをもらいました。  
**佐東範一** ありがとうございます。はい、では締めに入りますよ。  
**吉野さつき** 今回「忘れないために」というタイトルがついていますが、芸術の力や可能性というのは、見たくないものでも見なくちゃと思うようなことや、忘れないけれど忘れちゃいけないことを可視化してくれたり、それから違う形で体験の中で何かをつないでくれたりする重要なものじゃないかと思えます。だから昔からずっとあるんじゃないかなと思えました。最後に私が思ったのはこの企画自体がそういう意味でもとても良かった、私自身参加でき

て本当によかったなと思つているんです。ここにいるみなさんとこういう風に話せる時間ができたり、いろんな人とも会えました。これがなかったら会っていないんです。高橋さんたちとも、おいしいホタテとも（笑）。今まさに森さんが言われたように、現場に行き、現場で考え、現場で語る、その為のこの時間、こういう企画は一回で終わっちゃ駄目な気がするんですけど続きはないんでしょうか、そう思いつつバトンをそのまま佐東さんに渡します。

**佐東範一** この二年ぐらい地元の郷土芸能を習うというのをやっていて、ようやくなんかこう被災地に来たとか、何か支援に来たというよりも、完全に来るのが面白くて会いにきている感覚になっていきます。例えば昨日法印神楽を少しだけ習わせていただいて、そうしたら次見る時に見る目は違っ

と思うんですね。「ああ、あの足の運び上手いな」とまでは見えないけれども、そういう形で、神楽とか郷土芸能があることよってなにかこう関係性が全然変わったというか、僕たちが教えを請うて、こんなすごいものがこんなにいっぱいあるところだと知りました。本当に食べ物もそうだと思うんです。だから何ていうのかな：震災が起きたことは起きたこととしてか語れな

いのですけれども、僕にとつては本当に何か新しい世界、人生についての新しい世界に出会えたことというのがすごく多くて、面白くて面白くて来ている、というのがすごく大きな出会いだったと思うんです。

時間になりましたので、参加していただいたみなさま。ありがとうございます。今回をきっかけに何か具体的に始めるというより、こういうつなが

りを今回持ったことというのは、今吉野さんが言ったように大きなことだと思っております。これを形として継続するのか、どう継続するのか別にしてもこういう場があるということがとても大きなことだと思えました。

では皆さん、お疲れさまでした。

(二〇一四年十一月二十三日 富谷町 東北自治総合研修センターにて)

## フォーラムに参加したみなさん

Aコース／南三陸・女川震災遺構キャラバン参加者

〔宮城〕海子揮一、木村敏之、佐藤幸徳、竹井真理子、野口まどか、宮崎里子  
〔東京〕浅野五月、芦部玲奈、大内伸輔、坂本有理、松本辰明、三田真由美  
〔愛知〕近藤穂波

アーティスト

〔京都〕小山田徹（美術家）  
〔沖縄〕鶴見幸代（作曲家）

ナビゲーター

〔愛知〕吉野さつき（愛知芸術大学准教授）

Bコース／雄勝法印神楽ダンス・キャラバン参加者

〔宮城〕阿部久利、渡邊絵美  
〔東京〕奥麻実子、佐藤李青、森司、森隆一郎、山口紀子  
〔京都〕北本麻里

アーティスト

〔福岡〕藤浩志（美術家）  
〔インドネシア〕マルチナス・ミロト（ダンサー）

ナビゲーター

〔京都〕佐東範一（JCDN 代表）

通訳

〔宮城〕小野田照子

事務局（えずこホール）

水戸雅彦、玉瀧博之、星井理賢

(本文中、敬称略させていただきます。)





## 寄稿

旅を終えて

### 引用・参考文献

P22

※1 女川町ホームページ（平成26年3月10日掲載記事）

P23

※2 「地域防災計画」における地震・津波対策の充実強化に関する検討会報告書（総務省消防庁）

※3 東日本大震災全国消防団報告研修会報告書－平成23年7月30日自治体防災職員活動報告－（公益財団法人日本消防協会）

P28

※4 痕跡調査データ20121229版（東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループ）

※5 宮城県における東日本大震災で被災した無形民俗文化財調査成果データベース「2012 R-2 南三陸町歌津地区寄木集落」（東北大学東北アジア研究センター）

P37

※6 大川小学校事故検証報告書（大川小学校事故検証委員会）

### 忘れないための被災地キャラバンに参加して

今回マルチナス・ミロト氏のインドネシア語の通訳を担当しました。法印神楽を習いに行く、ということでしたので、下調べの段階ですでに神楽や古事記由来の演目等の説明でかなり大変な通訳になることが予想されました。また、2日目に予定されていたセミナーでの通訳方法については当初から危惧していました。時間が短いため逐次通訳の時間はとても取れないことがわかっていましたからです。結果として、法印神楽に関する通訳については心配したほどの難しい内容ではなかったのですが、セミナーの通訳については反省点が多かったです。

今回のキャラバンを通して、被災地の人間として、ミロト氏に被災地の現状を知ってもらう手伝いできたことは大変有意義でした。ただ、ミロト氏にも被災経験があり、それが今回語られる機会がなかったのは残念でした。

小野田照子（インドネシア語通訳）

## 感じてカンがえた旅

吉野さつき

水戸さんからナビゲーターの依頼があった時、正直とても迷った。私でいいのか？と思ったから。震災から一、二年の間は、なにかしらの活動で東北を訪れていたが、その後東京よりさらに西の地に住むことになり、新しい土地での生活と仕事に追われる中、そこにできた距離と心に残り続けているなにかと、どう折り合いを付けていいのかわからないまま月日が過ぎていた。それでも、水戸さんの「今だからこそ、外からの視点が必要なんです。」という言葉に背中を押され、このタイミングを逃すとこのまま同じ日々を繰り返し前に進めない気がして、引き受けてみようと思った。そして、まず率直な感想。引き受けてよかった。

自分の目で見ても、音を聞き、声を聞き、空気を身体で感じないとわからなかったことがたくさんあった。「情報」として知るのではなく、感じ取って考える二日間のキャラバン。今振り返って印象に残っているのは、共済会館のガラスのなくなった窓から見えた空と、行き来する大型トラックや重機の音と風、それから、大川小学校の前でなにかが押し寄せて来る感じがして苦しくなったこと、薄闇の中の防災庁舎前の献花台。そして、高橋家の皆さんによる素晴らしいもてなし。他にもたくさんあるけれど、女川でも南三陸でも、そこで暮らす人々が自然とどう共存するかということと、改めて向き合いながら未来を考えていたことが一番心に残っている。

自然に対して人間の力でできること、コントロールできることなんてほんのわずか。そして海は人間の予想を超えるスピードで再生している。ずっと海とともに生きてきた女川の人々や、南三陸の漁師さんたちのお話の中には、どこの地域にも活かせる示唆に富んだ言葉がたくさんあった。人間も自然の一部のはずなのに、私たちはどこでそれを忘れてしまったんだろう。

南三陸の漁師、高橋さんのところで副区長さんが言われた「五感を大事にしないとイケない。」という言葉。五感を通じて自然の変化を感じ取ることは、自分の身体を捉え直し他の生命との関わりを感じて生きることとつながっている。そして、個体としての生き物には必ず死が訪れる、しかしその死は必ずなんらかの形で新しい生命とつながっている。古くからの信仰や儀式やお祭りに託された、生と死と再生の循環への思い。芸術もまた、そうした思いと深く結びついていたものではなかったか？そんなことも改めて考えさせられる二日間の旅だった。

そういえば、今年のお正月、高橋さんのところに注文した帆立やカキを実家で両親と食べた。届いた帆立はまだ生きていて、殻を開けようとするとしっかり閉じてしまい、母と二人がかりで一っ苦戦しながら開けた。殻についていたピンク色の帆立の留め具を見て、高橋さんがこれを綱につける仕事のことを話していたなあと思いついた。あの時五感で感じて味わって、私の身体が受け取ったものを、感謝をこめて次の誰かに手渡していきたい、お正月の台所で生きて抵抗する帆立とその留め具を見ながら、そんなことを思った。

よしのさつき \* 愛知大学文学部メディア芸術専攻准教授

もちかえり

小山田徹

「来年からホヤが大きく育つんだよ。ホヤはウメエーよ。中に米つめたホヤ爆弾、皆に食べてほしいなー。又、食べに来てよ。」

「ホタテもアワジも魚もこの湾のはうまいよ。海は再生してる。うちのカーチャンの料理はうまい、たくさん食べて行つて。」

キャラバンで訪ねた私たちを迎えたのは食のもてなしと地元の恵みを力強く語る笑顔だった。本当に美味しかった。私たちのキャラバンチームは終始食べ物ネタで話に花が咲いていた。

さて、キャラバンで私たちは何を思考し、何を持ち帰ったのか。震災当時のことを聞き、震災遺構も見学したが、私自身最も深く考えさせられたのは、「私は自信を持って人様にオススメ出来るものを、自身の風土環境、技術、人間関係の中に持っているだろうか？」ということだった。都市部での生活では、欲しいもの、良きものはお店に行ったりインターネットで注文することが当たり前で、「選択」という技術で生きている。そこには「自らの」環境との関わりや技術、辛さ、喜びが抜け落ちていて、充足感や消費し続けるということではしか獲得されない。その消費の形が現代社会の歪み、様々な問題を引き起こしていることは皆も薄々感じている。

震災の事実を前に不謹慎かもしれないが、今回お話をうかがって私はうらやましかった。以前の生

活を破壊され問題は山積みかもしれないが、愛する土地、風土、食材、味を持ち、誇りに思う仕事、技術を有し、支え合う家族や仲間、組織を言葉に出来ること。もちろん全ての方々がそうでないにしても少なくとも喜びを持って語る方がいる地域であることは、私のこれからの生活を深く考えさせられるものであった。震災を機に社会が、個人が自らの生活の在り方を改めて考えねばならない時である。このままの社会、経済、価値観で継続できる時代ではなからう。

では、どのような未来を目指すのか。私も喜びを持って「食べてって、見てって、又来て」と言えるようになりたい。そういう社会にしたい。今回のキャラバンの「もちかえり」はその大きな課題だった。

こやまだとおる \* 美術家

## 忘れないための被災地キャラバンを終えて 鶴見幸代

女川町観光協会・阿部さんのお話で、なまっていることを訪問客の方から指摘され恥ずかしかったというエピソードが印象的でした。わたしも、茨城県出身者として、なまりのベースも近いことから、恥ずかしいという気持ちも痛いほどわかる一方で、なまりや方言こそ、地域文化のファクターとして積極的に使って継承されなければならないと思っています。地域によって自然災害の種類が違うので、心がけ、防災、避難の方法と手順、緊急時の生き延び方も異なるでしょう。そうした命に関わる重要な知恵や知識や情報が、その土地の人々の言葉による教えでこそ、正確な表現で伝わる可能性が大きいのではないかと思います。伝えたいところに正確に伝わらないと、生命に関わる事態につながることを今回学びました（特に防災無線のエピソードから）。芸能、絵、詩、歌や物語などで、継承されているものもあるでしょうし、そもそも文化芸術の起源は、生きるための知恵を伝え、共有されるためにあった側面も大きいはず。それらを改めて発見したり、お年寄りとの対話を設けて教えや言葉をいただいたり、現状の様々な要因から新しく創り、行事や芸能に生かして継承していく、というような取り組みは、ひとり一人が日常生活の中から意識的にやることのひとつでしょう。

これまでの大切な知恵を知っている大先輩達と向き合えるのは、あと十年内くらいの勝負です。琉球古典音楽の歌三線の師匠（一九三一年生まれ）にお願ひし、あまりにも酷い体験であったので、思い出したくないからできるだけ口にしたくもないと、なかなか語ってくれない沖縄戦のことと、戦後の復興と三線音楽の関係を、被災地キャラバンを契機に理由を伝えてお話をうかがいました。

現在沖縄では、古典音楽から舞踊、民謡など、郷土文化に携わる「一般」人口率が非常に高いのは、戦後復興の取り組みと密接に関係していることがわかりました。なんにもなくなってしまうだけ、歌三線、舞踊、獅子舞はある！ということ、捕虜収容所から住まいの首里に戻るや否や、首里の芸能の復興をリードし、それ以来の祭りや、毎日の生活の中でも文化活動を絶やさないうちが今でも継承され、生き甲斐と誇りになっています。毎晩のお稽古場は、世代間を超えた重要なコミュニケーションシーンの場ともなり、門下生の健康を確認するとともに、受け継がれてきた歌を背景にした学びが行われています。

「忘れない」ために、心がけていきたいこと。他のだれかに伝えたい意思、伝えて欲しい意思のやりとりが成就した瞬間に、他人事でなく私事として落ちてきて、忘れにくくなる、という経験は多くの人にあると思います。芸事が少しずつ身についていくように。生き延びるために、生きる喜びを知るために、不測の事態があつてからでなく、その前に、身近な人同士はもちろん、遠くの人々ともパイプをつくっていくこと、そのために五感を通じた交流の機会や手段の開発を絶やさないと、どこにいても実践していきたいと思えます。

つるみさちよ \* 作曲家

## 雄勝法印神楽を習う 佐東範一

宮城県石巻市雄勝町に六百年に渡り引き継がれてきた法印神楽。我々の先生は、阿部久利さんと先輩の千葉さん。法印神楽を始める人が必ず「初矢」（天地創造の舞で、すべての舞の基本）。今伝わっているもの二十八演目あるそうです。先生がお手本を見せてくれて、みんなだまねる。神楽は、二間×二間の舞台の中ですべてが演じられる。そこに太鼓もあるので、実際には六畳ぐらいの中で、数人の神楽師が演目を行う。そのため身体の向きや、足さばきなどいろいろな決まった動きがある。先生の動きを見てみると、いとも簡単そうで、確かに動き自体は複雑ではないと思うのだけれども、まったく出来ない。こつちを向いているのが、足を回して、反対に向く。ある意味、回れ右を股割状態で行うのだが、自分がどつちを向いていて、次に回った瞬間に、どこを向いているのかわからなくなる。何度も何度も繰り返して、それでもわからない、覚えられない。あーあ。

通常、神楽を始めると、週三回の稽古で四十五日がひとつのめどで、神楽師に向いているかわかるらしい。この「初矢」が身体に入るのにそれぐらいはかかるらしい。そうだろうと思った。面もつけさせてもらった。見えない。視界があまりに狭くて周りが見えない。この面をつけて、六畳の中で人とぶつからず、そして舞台からも落ちないで演じられるようになるなんて。それだけでも大変なことだ。

神楽は神事であり、宇宙や自然や古代と繋がる芸能でもあり、そして人々を楽しませる娯楽でもある。話を伺うと大変面白い。神楽にもいくつかの流れがあり、法印神楽は修験者山伏により、一子相伝、口伝で伝承されてきた、そうだ。そして法印と名がついているが、明治元年の神仏分離が行われた時に、神との分離のために日本書紀や古事記の内容に組み直しがなされたらしい。というお話を伺い、そうか子供の時に習ったことが、実際に今に繋がっていることに、好奇心が掻き立てられる。

結局何回見本を示して教えていただいても、どこで始まるのか、どのタイミングで回るのか、あまりにもわからず、こんなに覚えの悪い生徒で申し訳ない気持ちになるが、先生の「それが普通です。」という暖かい言葉に救われる。

被災地の数多くの郷土芸能に出会う中で、本当に日本は文化大国だったのだなということを感じています。郷土芸能が、芸能そのものの質の高さもありますが、各地域の子供から高齢者までを繋ぐ役割を担っている。芸能を引き継ぎながら、その地域の人々の繋がりや地域の中の大切なことを引き継いでいく大きな装置のように感じました。

いつのまにか、日本はこれまで大事に引き継いできた文化芸能と、西洋からの文化が切り離され、日本が本来持っていた文化をおろそかにしてきたような気がします。今回の震災がそのことを気付かせてくれたように思います。もう一度日本の文化を考え直すことが必要と思いました。このような機会を与えていただきありがとうございます。

## 記憶は記録によってねつ造されてしまうから・・・ 藤浩志

記憶は記録によって編集され、つくられてしまう危険なものだ。あらゆる事実は記録によってのみ伝えられ存在してきた。どんな事実があり、どんな記憶があっても、その存在が周りの誰にも明かされることなく、秘められていたり、誰も知られず、関係もせず、繋がっていない状態だとしたら、その事実そのものが存在しないことになる。その存在は外部とのなんらかの関係を持つことによっても発生しない。

記憶や様々な事実と同様に、人の存在もまたその人に関係するものによって成立する。家族関係、仕事関係、友人関係、恋愛関係、そして生活圈や地域との関係などによって存在する。自分の存在が関係の中で成立していたという事実はその関係を失うことで初めて気づくことが多い。大きな自然災害や事故などの被害に遭い、多くの関係を失ってしまったものは自分が存在するという感覚を失ってしまう。「自分自身がなにもなのかわからない」「自分の存在がわからない」との発言は、強い関係が切れた後に発せられる。

不幸なことに多くの記録は生き残ったものによって、そして力の強いものによって、ある意思を持って編集され、つくられる。それは善意によるものもあれば、悪意によるものもある。また利益を得るための記憶が記録の編集によってねつ造される可能性だってある。人は都合のいいように記憶を再編集してしまう。対等に結婚を誓ったはずの二人でも、男性、女性の立場それぞれが微妙にずれながら記憶が編集され変化し、五年後、十年後、三十年後と全く違う記憶をそれぞれが持っていることはよくあることだ。戦争の記録と同様に今回の災害の記録もまた、生き残り、発言できる

人から作られてしまう。亡くなってしまった人は発言できないし、発言できない不都合を持った人もまた発言できない。そこに関係する人があらゆる想像力を働かせて、体験したことのない記憶を記録によって作り出し、その存在を作り出すこともある。多くの歴史はするように強い権力者の都合によって編集され利用されてきた。残念なこととその記録の編集に絵画や彫刻を含む芸術の技術は活用され、よりリアリティを持った質の高い記録として多くの人々の記憶をつくってきたもっている。

今被災地でもとても大切なことはそのような大きな力による記憶の編集に惑わされることなく、しっかりと、被災地に存在しているはずの、まだ存在していない多くの事実に目をむけ、耳を傾け、心を開き、多くを感じ、誠実な関係を摸索することなのではないかと思う。伝えるべきこと、存在すべきことをちゃんとつくり出す精神のありようが問われているのだと感じている。

今回参加した雄勝法印神楽の体験は、地域の誇りを繋ぐ活動の重要性を感じ、そこに関係を繋ぐデモンストレーションとしての意味が大きかった。残念ながら、わずかな現場しか巡ることができなかつたし、関係を持つべき多くの人に到達したともいいがたい。しかしこの延長に様々な関係がゆるやかに広がり、将来的にかならず大切にすべき現場に到達するのだと信じている。

繊細な視点を持ち、見逃しがちな些細な事実としっかり関係を深めることが大切だと思う。誠実な記録を目的とし、専門性を持ったキャラバンを構成することが必要なのではないかとも感じた。もちろん一般参加者に開くことも必要だと思う。しかしそれ以上にしっかりしたコアメンバーを構成し、多くのことを多くの角度から感じ、語り、そして関係を育み、記録することで地域社会に欠かせぬ存在を摸索することが必要なのだと思う。

## エピローグ

取材のため、南三陸町歌津の高橋七男さん宅を再び訪ねた。早朝の港では高橋さんの船「栄樹丸」からワカメが水揚げされていた。根から葉までつながっている姿を見るのは初めてだ。褐色のワカメは息子の栄樹さん、祐樹さん兄弟の手で茹でられて鮮やかな緑に変わった。「食べてみて」と手渡されたメカブに嚙りつき頬張った。鼻腔いっぱい磯の香りが広がり、温かな食感が喉を滑り落ちた。海そのもの、生命そのものをいただいているようだ。この海の幸を震災で縁ができた遠地の人たちにも送るのだと伺った。素敵なお土産を生み出す海の暮らしは素晴らしいですね、と箱詰めする奥様の和子さんに言うと、「モノじゃないよ。ごちそうしたいっていう心。やっぱり心なんだよね。」と笑顔が返ってきた。

震災後、私たちは「被災地のために何ができるか」と繰り返し自らに問い、または問われ続けてきた。しかし同じ被災地に住む私にとって「被災地のため」という言葉は、どこか居心地の悪さを感じるものでもある。現地で震災の影響の渦に精一杯立ち向かっている人たちに接する態度として「～のため」では乱暴すぎるように思う。であるならば、「～のため」ではなく「～と共に」へ意識を変えてみてはどうだろうか。FORからWITHへ。震災に限らず、社会と共に、子どもと共に、仲間と共に何ができるか。そう考えることで人と人の間に新たな地平が拓かれ、可能性の花が咲くように思うのだ。

本書は被災地を旅するという「訪問者の視点」を中心に描かれている。いわば現地との関わりは「点」でしかない。しかしその点の向こう側にはとても豊かで力強い生の世界が広がっていた。今回の企画で語り合ったみなさんはその地で共に舞い、共に食べることでその「点」を未来への扉に変えたように思う。もし行くべきか迷っている方がいたならば、本書がその扉への手がかりになることを願っている。

旅のおわりの先の、新しい日常に向かって。

編集 海子揮一（一般社団法人対話工房 代表）

## アーティスト／ナビゲーター プロフィール

### 小山田徹 *Koyamada Toru*

(美術家)

1961年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。1998年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。近年、洞窟と出会い、洞窟探検グループ「Com-pass Caving Unit」メンバーとして活動中。大震災以降の女川での活動を元に出来た「対話工房」のメンバーでもある。京都市立芸術大学教授。

### 鶴見幸代 *Tsurumi Sachiyo*

(作曲家)

茨城県坂東市出身。東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。コンサート音楽、合唱、映画音楽を手がける一方で、横浜みなとみらいホール、明治安田生命社会貢献プログラム、世田谷パブリックシアターなどで、さまざまな人々と共同作曲も行う。メンバーである作曲家グループ「クロノイ・プロトイ」が、佐治敬三賞受賞。鶴見幸代作品集CD「eu canto..」をリリース (fontec)。公益財団法人沖縄県文化振興会プログラムオフィサー。JACSHA (日本相撲聞芸術作曲家協議会) 理事。

### 吉野さつき *Yoshino Satsuki*

(愛知大学文学部メディア芸術専攻准教授)

英国シティ大学大学院にてアーツ・マネジメントを学ぶ。公共ホール勤務、英国での研修(文化庁派遣芸術家在外研修員)を経て、フリーランスのコーディネーターとして、教育、福祉、ビジネスなどの現場で、芸術と他分野をつなぐ、アーティストによるワークショップを数多く企画。公共劇場や芸術団体のアウトリーチ事業や、ワークショップの企画運営を担う人材育成プログラムにも各地で携わっている。

### 藤浩志 *Fuji Hiroshi*

(美術家)

1960年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志し、京都情報社を設立。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かしたデモンストラーションを実践。福岡県糸島市在住。NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館館長。秋田公立美術大学教授。

### マルチナス・ミロト *Martinus Miroto*

(ダンサー・振付家)

5歳よりジャワ伝統舞踊を学び、コンテンポラリーダンスの振付家、俳優、ダンス講師として、世界中で活躍しているインドネシアを代表する舞踊家。86年〜ミロト・ダンスカンパニー、1998年〜ミロトダンス財団、2001年〜ジョグジャカルタにダンススタジオ・シアター“Studio Tari Banjarmili”を創設、2007年よりBedog Arts Festivalを開催。伝統と現代をいかに繋いでいくかをテーマに様々な作品を生み出している。

### 佐東範一 *Sato Norikazu*

(NPO法人ジャン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク代表)

1960年北海道生まれ。80〜95年舞踏グループ「白虎社」で舞踏手兼制作者として活動。96年米・ニューヨーク、ダンスシアター・ワークショップにて1年間のアートマネジメント研修。3年間の準備を経て、2001年NPO法人JCDN設立。以降「踊りに行くぜ!!」「コミュニティダンス」をはじめ、全国で社会とダンスを繋ぐ様々な活動を行っている。震災後、2013年より「習いに行け!東北へ!!」を開始、2014年夏には「三陸国際芸術祭2014」を大船渡、陸前高田などで開催。



## 忘れないための被災地キャラバン

発行日 2015年3月31日

編集・デザイン 海子 揮一

協力 一般社団法人対話工房（内田伸一、渡邊武海）

企画・製作 えずこ芸術のまち創造実行委員会  
仙南芸術文化センター（えずこホール）  
〒989-1267 宮城県柴田郡大河原町字小島 1-1  
Phone : 0224-52-3004 Fax : 0224-51-1130  
URL : www.ezuko.com Email : info@ezuko.com

発行 みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会  
東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）  
えずこ芸術のまち創造実行委員会



優れた芸術文化と鑑賞の機会を充実しながら、県内各地で開催される芸術文化活動を総合的に結びつけることで、みやぎらしい創造的な芸術文化圏の創出を目的に、宮城県が平成9年度から開催している文化事業です。

ART  
SUPPORT  
TOHOKU-  
TOKYO

本事業は Art Support Tohoku-Tokyo(東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)です。  
※「東京文化発信プロジェクト室」は2015年4月1日より「アーツカウンシル東京」と組織統合します。

